

# 中国語動詞と形容詞とが構成する統合型 の文法的意義特徴（その2）

——動詞と形容詞“清楚”の結びつきを通して——

大 滝 幸 子

- 1 はじめに
- 2 これまでの先行研究のまとめと再検討
  2. 1 先行研究：思考動詞①“認識”“了解”と“清楚”の組み合わせ
  2. 2 ①“認識”“了解”と“清楚”“明確”“明白”“糊塗”“模糊”の組み合わせ
  2. 3 先行研究：視覚動詞とA地VO型④“看”と“清楚”“模糊”の組み合わせ
  2. 4 ④“看”“聽”と“清楚”“明確”“明白”“糊塗”“模糊”の組み合わせ
  2. 5 先行研究：「SVOVA了型」「SVOV得A型」の統合意義特徴
  2. 6 ⑥“問”⑦“説”“表達”と“清楚”“明確”“明白”“糊塗”“模糊”の組み合わせ
- 3 本稿で新たに規定する統合意義特徴
- 4 おわりに

## 1 はじめに

筆者は拙稿1999 a<sup>(1)</sup>において、中国語形容詞A“清楚”と述語結果補語統合型（VA型）の中で組み合わせる中国語動詞Vを、まず状語中心語統合型（A地

V型)で組み合わせた場合の用法の違いに注目し、次に語義的意義特徴の違いに注目することによって、次の6種類に大雑把に分類した。

- ①思考行為V “了解” “認識” “解釋” “知道” “記” “分” “明白”
- ②話す行為V “問” “打聽” “說” “講” “談” “表達”
- ③書く行為V “標” “抄” / “寫”
- ④知覚V “看” “聽”
- ⑤具体的動作V “點” “數” “算” “查” / “洗” “印” “蹭”
- ⑥抽象的行為V “搞” “弄” “鬧” “摸”

また、②話す行為Vグループに属する動詞を下位区分して、“問” “打聽”の比較：“說” “講” “談” “解釋”の比較：“表達”についての検討を行なった。

拙稿1999b<sup>(2)</sup>では“清楚” “明白” “明確”の意義素記述と①思考行為Vグループの動詞“了解” “認識”との統合について検討を加えた。

本稿ではこれらの検討分析結果を踏まえて、以下3点の新しい観点から、動詞を10グループに分類しなおすことにする。

- (1) 動詞の格(意義素が内包する意味的項目の一つ)とその格補填語が担う語義的特徴という観点から再検討を加える。
- (2) VA型, V得A型, A地V型において5種類の中国語形容詞との共起制限のありかたに基づいて中国語動詞を概観した10グループ30個の動詞<sup>(3)</sup>と比較する。
- (3) VA型, V得A型, A地V型を内部に含む, 上位統合型12種類<sup>(4)</sup>のなかでの用法を調査する。

本稿で調査対象とした動詞10グループ30個は以下のとおりである。なお、Sは、動詞Vに対し原則として主語の位置に置かれる格、Oは賓語の位置に置かれる格を表わす。また、( )内に記した語義的意義特徴は、右に列挙してある動詞グループのOを補填する単語やフレーズ(以下、「O補填語」と呼ぶ。同様にSを補填する単語やフレーズを「S補填語」と呼ぶ。)に共通する弁別的特徴

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）  
の束である。以下、本稿での①～⑩の符号は、この動詞グループを指す。

【“清楚”との統合形式を分析するための動詞10グループ】

- ① 思考動詞Ⅰ：S＝経験者 O＝思考対象<sup>(5)</sup>  
（実態が明らかにされていない事柄） “認識” “了解”  
（外部から情報として与えられた知識） “知道” “記”
- ② 思考動詞Ⅱ：S＝経験者 O＝思考受け手  
（論理や事実に基づいて区別されようとする、異なった情報や事物）  
“分” ：行為受け手（補語“開”の付加などによる格の変化）  
（論理や事実に基づいて分析説明されようとする情報） “解釋”
- ③ 思考動詞Ⅲ：S＝経験者 O＝思考生産物  
（精神活動で生み出された経験者の思考） “想”
- ④ 知覚動詞：S＝経験者 O＝行為対象  
（五感を刺激し知覚を生じさせる刺激の発信源） “看” “聽”  
：思考生産物（補語“出”の付加などによる格の変化）
- ⑤ 言語行為動詞Ⅰ：S＝動作主 O＝思考受け手；相手  
（聞き手から獲得しようとする情報に関する事物；聞き手）  
“問” “打聽”
- ⑥ 言語行為動詞Ⅱ：S＝動作主 O＝思考受け手  
（聞き手へ伝達しようとする情報） “說” “談”  
（聞き手へ伝達しようとする動作主自身に関する情報） “表明”  
（情報として発信されようとする思考） “表達”
- ⑦ 調査行為動詞：S＝動作主 O＝行為対象；思考対象  
（ある情報を含んでいる事物；取り出されるべき情報）  
“查” “算” “點” “數”
- ⑧ 形状変化動詞：S＝動作主 O＝行為受け手  
（ある目的にそった変化を起こさせようとする物体） “洗” “印” “抄”

⑨ 表現行為動詞： S＝動作主 O＝行為生産物；思考対象

（言語以外の芸術活動によって生み出された作品；作品が扱う題材）

“畫” “唱”

（言語を用いた表現活動によって生み出された作品または字体；作品が扱う題材）

“寫” “標”

⑩ 行為代動詞： S＝動作主 O＝行為受け手

“弄” “摸” “鬧” “搞”

## 2 これまでの先行研究のまとめと再検討

本稿での議論を始める前に、本稿で参考にする先行研究を筆者のいくつかの拙稿を含めて概観する。同時に、それらの分析結果についての確認や新たな見解（アンダーライン付記）も付け加え、以下の論考に用いることにする。

まず、筆者が統合型の統合意義特徴を見出すために用いてきた手順をまとめておく。

原則としてまず、（１）用例としてとりあげた最大統合型（単文）の叙述内容がどのようなものかを検討することによって、３種類の基本統合型 V A 型、V 得 A（A'）型、A（A'）地 V 型が担う統合意義特徴と、その中の単語の語義がゲシュタルトとして表わす統合意義がどのようなものであるか、を記述する。すなわち、単文のなかの基本統合型に対して、叙述の営みとして「判定叙述・変化叙述・出来事叙述」のどれが加えられているか、などを観察することによって、単文の意義からそれを除外したあとに残った意義を統合意義として記述する。さらに、（２）その統合意義を成立させている動詞と形容詞の格補填語を検討し、それらの語義の総和を除外した意味を、統合型の統合意義特徴として認定する。

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）

次に，“清楚”の意味と用法には性質形容詞（評価形・描写形も含め）と思考動詞の2タイプのあることを、拙稿1999b, pp161-166において確認してある。その記述を，【清楚・表1】にまとめて表記する。

【清楚・表1】

意味的事項	清楚 a (性質形容詞CP2)	意味的事項	清楚 v (①思考動詞 I)
判断者	不定人称者	経験者 (S補填語)	有意思者
判断対象 (S補填語)	見出しやすい示差的特徴をもつ事物 <sup>(6)</sup>	思考対象 (O補填語) (NP/AN統合型) ★	観察対象となる行為に関する事柄
判断方法	帰属度スケールを用いる	(VP/SP統合型) ★	行為に関する事柄 <sup>(7)</sup> の示差的特徴(不定詞使用)
判断基準	典型基準 (判断者が示差的特徴に抱くイメージ)	思考方法	示差的特徴の存在を情報として確認入手しようとする
判断結果	判断対象とした事物に示差的特徴が存在すると判断する	思考結果	示差的特徴の存在を情報として見出す
		思考生産物(O補填語) (SP統合型) ★	見出した情報 (焦点形式でマーク)

★統合型が異なると，その表わす格も異なる。

また，本稿では“清楚”の類義語シソーラスとして“明確”“明白”“糊塗”“模糊”の4個の形容詞をとりあげ，“清楚”と比較対照しつつ統合型内での共起制限を考察する。

“明確”“明白”は“清楚”と同じく，性質形容詞と思考動詞の2タイプがあり(拙稿1999b pp157-159)，“糊塗”はS補填語として経験者格(行動を行きない有意志者)をとり，“模糊”はS補填語として判断対象格(事物)をとる。

## 2. 1 先行研究：思考動詞“認識”“了解”と“清楚”の組み合わせ

先行研究として拙稿1999bを最初にとりあげる。

拙稿1999bでは、①思考動詞Ⅰのグループのうち、“認識”“了解”との組み合わせについて、9種類の統合型内での用法の違いを検討した。そこでまず、その要点を整理しながら補足すべき視点やより正確と思われる見解を述べる。

“清楚V”は“了解”“認識”と同じく、思考動詞Ⅰのグループに属する。現代漢語詞典では、“清楚”の語義解釈に“了解”を使用している。しかし、両者が組み合わさる場合は必ず“了解”の方が述語の位置にたち、“清楚”が補語の位置に後置されて用いられる。前者だけが完全な行為動詞としての語義も有しているためと考えられる。“認識”と“清楚”の文法的位置関係でも、思考する姿勢がより能動的な“認識”の方が述語の位置に置かれている。この3つの単語の語義関係を【清楚・表Ⅱ】にまとめて表示する。

【清楚・表Ⅱ】 S P 統合型内で述語として用いられた場合の、示差的特徴

了解V（思考） 有思想者が思考対象について、 <u>詳しい知識を</u> 保持する（変化をする）	清楚A <u>物体や事柄（あわせて事物）が、</u> おのおのの示差的特徴をはっきり示す（状態にある）	認識V（知覚） 有思想者が <u>思考対象の形象から、</u> 弁別的特徴を見分ける能力を保持する（変化をする）
了解V（行為） 有思想者が <u>行為対象を調査して、内的経験としての新しい知識を得る（行為を行う）</u>	清楚V（思考） 有思想者が行為に関する事柄に対し示差的特徴を見い出せる（変化をする）	認識V（思考） 有思想者が思考力を働かせることによって、 <u>ある事柄に関する正しい見解を新たに獲得する（変化をする）</u>

【清楚・表Ⅱ】の如く、判断形容詞としての“清楚A”と、思考動詞Ⅰグループに属する“清楚V”とが区別されることにより、“了解清楚”“認識清楚”はそれぞれVA型の場合もあれば、VV型の場合もある可能性がでてくる。VV型では述語のVも補語の位置のVもそれぞれS補填語のほかに、O補填語も

必要とする点がV A型と異なっているが、V A型と共通する統合意義特徴も存在すると考えてよい。そこで、V V型が成立する単文が備えるべき条件として、まず、次の点を認めることにする。

【V V型成立の条件】

I：述語位置に置かれたV（「述V」と略称する）は、補語位置に置かれたV（「補V」と略称する）よりも、具体的かつ能動的な行為を表わす。

II：補Vの動作主または経験者は、述Vの動作主または経験者と「同一の有意思者」である。

また、V V型の統合意義特徴として、これまで記述してきた（N）V A（了）型の統合意義特徴5種類のうち（拙稿1999b, pp176-177）、述語動詞の相変化や格要素および格的な事物の存在を一つの現象素として認める【（N）V A（了）型統合意義特徴V】の考察を、まず当てはめて考えることができよう。

【V V型の統合意義特徴I】＜補Vが思考動詞の場合＞

V V型の中では、述Vが指示する相プロセスに対し、補Vの指示する相プロセスは「述Vの動作主または経験者と同一の有意思者」に同時に生じる、一定方向に向かって変化するプロセスを指示するものでなくてはならない。

以上のような、統合意義特徴を分析するための文論や仮説にたつならば、①思考動詞Iグループ内の“了解”“認識”と“清楚A”“清楚V”が組み合わさった用例における統合意義特徴や語義は、例えば次のように解釈・分析されることになる。

【V A型・V V型用例①】（拙稿1999b）

Ex.a 這件事，我已經了解清楚了。→事実叙述“已經～了”によって加算される（＋既然の陳述）…多義文である。

(意義1) (1) “我已經了解清楚了”は主部“這件事”に対する述部担当のS P型である。文法的呼応も語義的呼応も、まずこのS P型内から優先して生じるといえる。したがって“清楚V”のS補填語(経験者)と“了解V”(動作主)のS補填語はともに“我”であり、統合型はV V型になる。(2) “清楚V”によって動詞の相変化に伴って一方方向へ変化するプロセスとして指示されているのは、“我”がいろいろ情報を得て、知識が鮮明になっていく過程である。

(訳例) この件について、私はすでによく理解してはっきりした知識を得ている。

(意義2) (1) “這件事”は行為に関する事柄ではなく、非人為的事柄を示し、“清楚V”のO補填語(賓語)にはならない。“了解V”のO補填語としかみなせない。(2) “了解V”のO補填語(行為対象)は同時に“清楚A”のS補填語(判断対象)でもある。

(訳例) この事は、私がすでに調査して明らかにしている。

Ex.b 我們把事情徹底了解清楚了。→事実叙述(出来事:方法)“徹底”によって加算される。

(1) 処置の介詞“把”の賓語となった“事情”は、“了解V”のO補填語としての思考対象から、「処置を受けて変化を示す思考受け手」へと格の変化を生じる。(2) “了解Vは“徹底”により出来事:方法が付加された結果、「調査する」という行為動詞になる。(3) “事情”は異相までの変化を経て更に“清楚A”になる“了解V”の「思考受け手格」を補填すると同時に“清楚A”のS補填語になる。

(訳例) 私はこの件を徹底的に調査して、その情報をより鮮明にしている。

Ex.c 他應該把這樣的形勢(情況・問題)認識清楚了。

→論理叙述(必然または蓋然)“應該”によって加算される。

→既然の陳述(発話時点で成立した論理)



中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）

このEx.cは「“把”字句が必ずしも「処置」を表さない用例」である。

（1）“這個形勢”は“認識”のO補填語（思考対象）であるが、処置の介詞“把”の賓語として文法的特徴が思考受け手に変化すべきところ、“認識”には他の事物を変化させる作用はないため、受け手に受けるべき変化が生じない。したがって、論理叙述を“應該”などで加算し、そこに変化を認められたなら文として言い切りやすくなる。（2）  
こういう述語をもつ文中では、“把”統合型の＜同一状況内での因果関係を出来事チェーンとして叙述する＞営みを果たす統合意義特徴によって、述語“認識”と異なる何かしら別の行為（この用例では情報収集や研究や談合）が同一状況内で行われた結果、動作主の精神的活動“認識”に変化が生じたことが示唆されることになる。（3）その結果“認識”の相変化と同時に変化するのは“認識V”と“清楚V”双方のS補填語（ともに経験者格）である“他”の思考状態である。

（訳例） 彼はこのような情勢（状況・問題点）を認識し本質を知るべきであった。

以上のEx.a と Ex.b Ex.c の3例を比較対照した結果、本稿では単文単位で表示され、かつS P型の2項構成からなる形式以外の文法意義特徴（「状況意義特徴」と名づける。多くは＜“超越成分”＞として扱われてきた文法的構造によって表示される）に関する仮説と、介詞統合型の統合意義特徴を次のごとく規定する。まず、状況意義特徴の仮説を提示する。

【状況意義特徴Ⅰ】：主題位置への賓語の前方移動と格について

（Ⅰ）主題の位置へ前方移動していても、その形式が補填すべき格には変化がない。

- (2) 述部担当SP型に対し、叙述内容の成立範囲（現象素枠）を設定指示する。

【裏づけ】 Ex.a “這件事”は“了解V”のO補填語ではあっても、“清楚V”のO補填語ではない。この主題の位置へは“清楚V”のO補填語“事情的經過／真相／詳情”なども、当然置くことができる。しかし、V得A型では“這件事”が主題の位置へ置かれにくくなり、“清楚V”のO補填語になれる名詞のみが選ばれる。この違いは、二つの統合意義特徴の差異を反映している。

事情的經過／真相／詳情、他了解得很清楚。

- (1) 「V得A型においては「V得」「了解得」内の“了解”の意義素が持っていた格要求機能が消滅している」と考えられる。
- (2) この用例の“他了解得很清楚”は述部担当SP型である。優先的に結ばれる格補填関係では主語“他”が“了解得”“清楚V”の経験者格を補填する。
- (3) “清楚V”は思考動詞としてSV得VO型という統合型を構成することができない。そこで“清楚V”の賓語であるべきO補填語は主題の位置へ移動したと解釈できる。

（訳例） 事の經過／真相／詳細を、彼は調査してははっきりと知った。

上記の主題位置への移動に比べて、介詞の賓語となって文中で第二次格を表示する名詞形式は、その文法的機能が「文の背景すなわち状況への情報提供（詳述）」となるため、叙述の営みから離れて新たな制限を受ける。

【介詞統合意義特徴Ⅰ】：介詞の賓語が補填する格について

介詞の賓語になった形式は補填すべき格（正確には第二次格<sup>(8)</sup>）を、介詞により決定され、述語の意義素が規定していた格補填の共起制限から離れる。

【裏づけ】 Ex.b 行為の方式を表す“徹底”が使われると、介詞“把”（状況の中で見出される「行為／思考受け手」）は使えても、介詞“對”（その目的語は状況の中で見出される「思考対象」を表す）は出来事叙述との共起制限で完全に使えなくなる。

【裏づけ】 Ex.c 介詞“對”は“了解清楚（了）”と組み合わせにくくても、“認識清楚（了）”となれば、容易に組み合わせられる。（介詞“把”との共起制限とちょうど反対になる）とりわけ“終于”によって変化叙述のうち「到達点への経過」が加算された文脈では、介詞“對”が通常の表現であり、介詞“把”では破格の表現と感じられる。

他終于對這樣的形勢（情況・問題）認識清楚了。

これは、認識V”が思考動詞であり、その表示する述語類型が「経過」とどまり、述語類型「行為」を表す“了解V”と比べると、他の事物を変化させる能力が極度に劣っているためと考えられる。

（訳例） 彼はついにこのような情勢／情況／問題点にはっきりとした認識をもった。

【V得A型用例①】（拙稿1999bより）例文Ex.の順序は統合型毎にふる。

Ex.a 他們對這件事了解得很清楚。

介詞“對”は“了解清楚（了）”と組み合わせにくくても、V得A型“了解得清楚”となれば文脈意義からの補充がなくとも普通に組み合わせる。このことも、これは、「V得A型においては「V得」（“了解得”）のO格要求機能が消滅している」ためと考えられる（既出）。すなわち、相対的に様態補語Aの格要求機能（S補填語優先）が高くなっているために、介詞“對”O型との呼応が成立しやすくなったと考えられる。

この介詞“對”O型と共起しやすいことは、S V得A型の述語機能が「A」

にあり、述語類型としては「状態・過程（行為は例外となる）」を表し、SP型単位の叙述内容類としては「判定（変化・出来事は例外となる）」を表すという解釈の、一つの裏付けとなる。

Ex.a の文は3種類の解釈ができる。その原因は「很清楚」が文中で指示する現象素<sup>(9)</sup>が3種類ある」ためと解釈できる。単文として聞いた場合、その意味を想起する優先順位についてインフォーマントの語感はずべて一致していた。

- (1) “這件事”：「評価対象格」（O補填語ではなくなり、評価の対象として優先される）

（訳例） 彼らの調査の結果、この一件の実態がはっきりした。

- (2) “他們”：「経験者格」

（訳例） 彼らは調査を行なって、この一件についてははっきりした知識を得ている。

思考動詞“很清楚V”の経験者格を補填している。“清楚V”のO補填語、すなわち「この一件に関するはっきりさせられるべき具体的実態」は、文脈より補充され、潜在化していると解釈するべきである。（\*“他們很清楚這件事”は成立困難。“他們很清楚事情的真相／真相／詳情”は成立。（既出）

- (3) “了解得”：「擬似評価対象格」（ただし、相プロセスの中に存在している現象素ではなく、状況内に認められる「擬似格」である）

（訳例） 彼らはずまづらかにこの一件を調査した。

直訳的な語釈では、「彼らのこの一件に関する調査には調査するという「典型的な行為パターン」がはっきり現れている。」となる。

【A地V型用例①】（拙稿1999bより）例文Ex.の順序は統合型毎にふる。

Ex.a 他很清楚地了解到 <為甚嘛>那個工場會破產／破產了。

他很清楚地了解到 <談判的內容>。

（1）A地V（O）型内で“清楚” “了解”が共起するには、この“到”

という結果補語が必要である。“了解到”は述語の“了解”に“到”という結果補語の文法的意義特徴すなわち「動詞のO補填語が表していた述語の格（または格的要素：授受される情報，道具など）をく相プロセスの最終段階（異相）に存在するものへ変化させうる」が加えられた形式である。

【清楚・表II】で記述した“了解V”（行為）の意義素「有意思者が思考対象を調査して，内的経験としての新しい知識を得るに至る」に基づくと，“了解V”の要求する「思考対象格」（相変化の最初である平相より存在している）は，調査してその結果新しい知識を得ようとする対象であるく破産しそうな／破産した原因＞く談合の結果＞である<sup>(10)</sup>。そしてそれらの格が，“了解到”の賓語になることによって，異相であらたに獲得された知識としての「思考生産物格」に変化して存在していると考えられる。（2）賓語の形式がS P型である場合とN P型である場合とでは，思考生産物を表す形式が異なっている。Ex.a 内の2例についていうならば，S P型である場合は不定詞く為甚嘛＞への回答であり，N P型ではく談判的内容＞の情報である。（3）したがって，“很清楚地”が“了解”と共に起できないのは，“很清楚地”が「思考対象格」から「思考生産物格」として新情報と見なされたく破産しそうな／破産した原因＞く談合の結果＞—その精神界における指示対象は言語として表現されずに，文脈・場面すなわち「状況内」に潜在している—を詳述しているためと考えられる。

Ex.b 我們很清楚地認識到：和別人相比，他必須付出加倍的努力。

“認識到”は“了解到”に比べると独立性がつよく，宣言文の発句などにも使用され，認識している内容を独立して表すことができる。思考動詞は行為動詞と異なり，異相で成立した経験者の精神状態を言語として表現できて，単文の叙述内容を完成しやすいためと考えられる。

Ex.c 我們很清楚地／清清楚楚地認識到問題的重要性。

(1) “很清楚地”は評価形容詞形であり，褒義を表す。評価は確定した出

来事，言い換えるならば「状態に近づいた出来事」に対して下されるものであり，動作行為がすでに異相へ到達した結果について判定を下すと解釈される。

(訳例) 私たちはこの問題の重要性をあきらかに意識した。

- (2) “清清楚楚地”は描写形容詞形であり，臨時的状态（属性として固定していない，時空の制限下にある性質）を表す<sup>(11)</sup>。また，“認識到”と“了解到”を比べてみると，“認識”のような知覚・思考動詞を述語として用いた状況内では，「思考の過程」そのものを描写対象として，その明晰度を詳述すると考えられる。これは行為や思考の方式というような分析的に導き出された独立した状態を描き込むものではない。

(訳例) (その時に) 私たちは問題の重要性をまざまざと認識した。

これまでの考察では，A地V型の統合意義特徴を規定するにあたって用いた例文の述語形式が，「述語V＋“了”」（異相到達ではあるが過程の存在は無視した「変化成立」「異相出現」を表す）「“要”＋述語V（＋“一下／吧”）」（論理叙述であり，陳述として「命令・要求」を表す）ものだけであった。本稿ではA地V型の述語部分に補語が加わった用例の分析を補足し，3. § 4の項で【A地V型統合意義特徴IV】を規定する。

## 2. 2 ① “認識” “了解” と “清楚” “明確” “明白” “糊塗” “模糊” の組み合わせ

上記の考察分析に対して，本稿ではさらに，“清楚”の類義語グループである2個の思考動詞兼形容詞“明確”“明白”とS補填語が有意思者である“糊塗”とS補填語が無意思者である“模糊”の用例も考察の対象とする。その結果，統合意義特徴に関する考察として次の3点（§ 1～§ 3）を補足する。

§ 1：“認識”“明確”の組み合わせでは、事実叙述において「【把OVA型】  
【VOVA（了）型】が成立しても、【VA了O型】は成立しない」とい  
う言語事実をとりあげて、先に規定した【VA了N型】の統合意義特徴  
の説明能力を検討する。

【VA了O型用例①】

Ex.a ? 他認識清楚了這個問題。（“了”は文末位置の方が言い切りや  
すい）

\* 他認識明確了這個問題。

（対照）他把這個問題認識明確了。（“認識清楚”では文脈意義の補充が  
必要）

他認識這個問題認識明確了。

【VA了N型】の賓語に指示詞による限定修飾が加えられている場合の統合  
意義特徴については、拙著1999b（p176）において以下の統合意義特徴が指摘  
してある。

【VA了N型の統合意義特徴Ⅲ】

- (1) 動作行為の受け手となった物体、または動作行為の結果生じた生産  
物Nに対して加えられた動作行為には目標とする適正基準が必ず存在  
する。
- (2) 「動作行為が失敗して適正基準から逸脱した結果としての過分義」  
を判断形容詞Aで表す。（付記：一般論の叙述ではなく、「個別の事実  
叙述」のうち、現実として実現ずみのものを表示する）

形容詞“明確”について規定した意義素（拙著1999b, pp157-159）によれば、  
“明確A”は「（判断対象格）ある事柄の状態が確定していく方向にあるかどう  
かが、確認された度合い」が「（判断結果）不明な箇所のない、確定した状態が  
確認できたと判断する」というものである。この判断結果の語義的意義特徴は  
「適正基準から逸脱する」というVA了N型の文法的意義特徴（2）とは相反

するために、“他認識明確了這個問題”は成立しなくなると説明できよう。

一方、この文中における“認識清楚”の用法を、【文脈意義からの補充の受け方】という観点から検討するならば、次の解釈が成立すると考えられる。

(1) “清楚A”が“模糊”に対して、“清楚V”が“糊塗”に対して、それぞれ褒義を表す評価形容詞、また思考動詞であることが統合意義に影響していることが裏付けられる。褒義を表す評価形容詞は「VA了(定)N型」の統合意義特徴とは共起しにくい。

(2) “他認識清楚了這個問題”(Ex.a?)

この意味は「(訳例) 彼らは(以前よくわかっていなかった)この問題(の本質)をはっきり認識した。」である。すなわち、“認識清楚”は「VA型」ではなく「V(思考)V型」として経験者の意識の変化を表示している。それゆえ、文末語気詞による発話時点での新情報(成立または発見)を用いた陳述が好まれるのである。

(3) “認識清楚”を“把”字句と共起させる場合に必要とされる文脈意義による補充(または必然的な文脈意義の発生としても捉えなおせる)は、「これまで悟っていなかったことに気づいた、だから何らかの新たな対応を行わねばならない」という、「第一人称者(時に主語の動作主・経験者と一致し、原則的には話し手と一致する)の叙述内容に対する見解」である。(Ex.a(対照))

§2: 拙稿1999b, p175 では【“認識”と“了解”の違い】として、『“認識”は“明確”と統合し、“了解”は“明白”と統合し、その逆は成立しない。』とした。本稿のインフォーマント調査では、“認識”と“明確”が共起するという語感には同意が得られたが、「明白”は“了解”と共起しにくい。“多余”の表現としか感じられない。」との報告があった。

本稿では新たに【“認識”と“了解”の共通の用法】として次の2点を指摘する。



中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）

- (1) 両者とも経験者の精神状態を表す“糊塗”とは統合しない。語義的意義特徴に明らかな共起制限，すなわち同一経験者の思考過程（相プロセス）の進み方が“認識”と“了解”では知識の深化，明瞭化へ進むのに対し，“糊塗”は完全に相反する状態を表示するためである。
- (2) 両者とも“模糊”とA地V型でのみ統合可能であり，“模糊”は賓語のみを形容する。

この言語事実に対して，次のような文法的考察を加えることができよう。

### 【A地V型用例①】

Ex.d 他模糊地認識到以後的日子會變得不一樣。

他模糊地了解到為甚嘛這個工場要破產了。

（訳例） 彼はこれからの暮らしが変わっていくであろうとぼんやり意識していた。

彼はなぜこの工場が破産しかかっているかをおぼろげながら探り当てた。

【A地V型用例①】 Ex.a Ex.b Ex.c に対する文法解釈で指摘したごとく，補語“到”の付加を必要とする。すなわち，状語となる形容詞“模糊”は賓語である「思考生産物格の状態」を形容していると考えられる。

しかし，この形容するという文法的機能を，これまでは「A地VO型内にある状語「A地」は「賓語O」を判断対象格としていること」と単純に論じてきたが，述語の相プロセスに反する（または無関係にみえる）異相の状態を状語位置の形容詞が表示する場合も同様に考えていいのか，再考が必要であろう。特にA地VO型内でしか共起しない述語Vと状語Aとの組み合わせの場合については，本稿で新しく【A地V型の統合意義特徴IV】を規定する必要があると考えられるため，項を改めて論じる。

§ 3：“認識”“了解”は，ともに“清楚”“模糊”と「SA地V到O」内では

共起するが、「SA地把OV到～」の文型内では組み合わせられない。

それに対し、同じく介詞“把”字句を用いた「S把OVA（了）型」「S把OV得A型」では、そのVのO格補填語でもある“把”字句の賓語Oは、思考生産物として「“清楚不清楚”の変化をみせるかどうか」という視点で叙述され、組み合わせることができる。“模糊不模糊”は“認識”“了解”の相プロセスの方向性または範疇と全く一致しないゆえに、共起制限がかかり組み合わせられない（既出）。

ではなぜ“認識”“了解”は“清楚”と「SA地把OV（到）～」の文型内でのみ共起制限が生じるのか？その原因として次の2点が指摘できる。

（1）「SA地把OV（到）～」の文型内の“把”字句の賓語Oは、状語が表す<状態A>“清楚不清楚”との関わりを遮断され、その変化への視点が優先的に<動詞Vの賓語～（生産物）>がどう生み出されたかへ移される。（2）“把”字句の賓語Oは述語動詞の相プロセスがはじまる事点（平相）から存在するものであるが、思考動詞の場合、思考内容が変化した異相を<状態A>に結びつける以外に「把”字句の処置性」を担う呼応関係が存在しない。その呼応関係は「S把OVA（了）型」「S把OV得A型」の統合意義によって叙述される。上記（1）（2）の理由により、「SA地把OV（到）～」は、思考動詞“認識”“了解”と“清楚A”を組み合わせることができない。

## 2. 3 先行研究：視覚動詞とA地VO型④“看”と“清楚”“模糊”の組み合わせ

本項では先行論文として、<“視覚感知類”句子中動賓雙系形容詞狀語— 漢語狀位形容詞思考之一> 鄭貴友1998：漢語學習1998年第一期 を取り上げる。

鄭貴友氏の論文では、“看”を述語動詞とする「NP+A+VP+O」（「SG類の文」と命名）の文型を構成する典型的な“動賓雙系”的形容詞狀語として、

“清楚” “模糊”を例として挙げ、時に動詞を形容し時に賓語を形容するその用法について、以下の2点を構成要素間の関係として指摘する。

- (1) O賓語は感知される客体であり、知覚する主体やその知覚行為にとってみれば前提として存在していたものではなく、知覚行為から何ら影響も受けず、知覚主体からのコントロールを受けて変化を生じることがない。それゆえ、このO賓語が主語や主題として文頭へ移動することもない。
- (2) あらゆるSG類の文は、基本的意義を同じくする意思文や命令文へ変換することができない。(所有的SG類句子都不能變換為與之相應的意志句或祈使句)

鄭 Ex.a 他模模糊糊地看到一張地圖。

\* 他想模模糊糊地看到一張地圖。(意思文)

\* 他模模糊糊地看到一張地圖吧。(命令文)

本稿の調査によれば、この第(2)点については、はっきりと早計な推断であると考えられる。“模模糊糊地”を形容詞状語とする限りは、確かに命令文は成立しにくいと断定できる。しかし“模模糊糊地”を“清清楚楚地”に変更し、かつO賓語を限定指示するという叙述の営みによって「叙述時点だけでなく叙述地点も指定」したならば、状況(文の背景)が具体化されて、意思文であっても命令文であっても「特定の文脈意義を必要としない」普通の表現として成立する。

他想“清清楚楚地”看到那張地圖。(意思文)

你要“清清楚楚地”看到那張地圖。(命令文)

鄭貴友氏の論文ではO賓語について、「通常ひとつの名詞」という指定のみがあり、その定不定については論ぜず、用例も“一幅”“幾個”という不定の文法範疇である数量修飾しか扱っていない<sup>(12)</sup>。「不定のO賓語のみを扱う」理由を明示していないまま結論を出すのでは、偏頗な用例で総括的な推断を下すことになると思われる。

また、文学的に思い巡らせば、“模模糊糊地”を形容詞状語に用いたままでも、意思文が成立する場面が簡単に思い起こせる。

他想“模模糊糊地”看到她那樣的樣子。

(訳例) 彼は彼女のそんな様子を臆気に眺めていたかった。

O 賓語の定不定については、その定不定の違いが「SVA了O型の成立不成立」に影響していることが筆者の研究では明らかになっている。<sup>(13)</sup>この言語事実は単文の成立に関して、「言語による状況を特定指示する叙述がなされているかどうか」「その叙述は文脈意義として他の単文からの補充(潜在化)に頼ってよいのか、同一単文内に言語形式として存在すべきなのか」という、<文の背景を叙述する方式に関する研究課題>の一つである。A地VO型のO 賓語の定不定についても、今後詳しく分析していくことにする。

次に、鄭貴友氏の論文は、述語動詞“看”が“到／見”という補語を必ず伴うことを指摘したうえで、形容詞状語が述語に対して、“看”した後の“感知性態”((主観的)知覚状態)を具体的に表現し、O 賓語に対しては“客體性態”(客観的状态)を表現している、とする。この二つの意味は一致するときも、一致しない場合もあるとして、次のような用例を挙げている。

鄭 Ex.b 他清清楚楚地看到一幅畫(面)。<多義文>

→ 他看到一幅清清楚楚的畫(面)。(客観的状态)

本稿のインフォーマントの語感では、“清清楚楚的畫”という連体修飾統合型は稚拙な表現であり、中心語が“畫面”になってはじめて成立するという。そこで、( )内に“面”を加筆してある。具体的属性には「線がくっきりとしている、色彩の対比が明瞭である、造形が細やかで遠近なども判別しやすい」などがあがった。

→ (是)一幅畫(面)，他看得清清楚楚。(主観的知覚状态)

鄭 Ex.c 他清清楚楚地看到一幅清清楚楚的畫面。

他清清楚楚地看到一幅模模糊糊的畫面。

この「鄭 Ex.b」での指摘は、これまでのインフォーマント調査の中に散発的に現れた、「普通はS+A地+VO型よりも、S+V+A的N型の方を使う」という内省報告に一致している。拙稿1995<sup>(14)</sup>で検討した「SP統合型とA的N統合型での、形容詞と名詞の組み合わせに異なる制限があること」を鑑みると、これまで単文内で形容詞と呼応する判断対象格（形容詞単独）評価対象格（程度副詞「很」）描写対象格（重疊形）を探してきた視点は、SP型の統合にのみ注目した考え方であったといえる。今後の課題として、「A地+VN型」の統合意義特徴を考察する場合には「V+A的N型」との比較対照という視点を加えることにする。現在のところ、この視点にたった分析を行なうには用例の収集量が不足していて、立論には至れない。

ただし、これまでの統合意義特徴の考察をあわせて考えた場合、3つの例文の叙述内容に以下の如き違いを見出せる。また鄭 Ex.cの例文からも判然としているように、状語「AA地」は主観に偏った表現機能をもつといえる。

“他清清楚楚地看到一幅畫（面）。【A'地V型統合意義特徴I】より

AA形は流相（動作のやり方）に対する意思（＝もくろみ）を描写対象とする。

（訳例）彼にはある画面がはっきりと見えてきた。

→ 他看到一幅清清楚楚的畫（面）。

（訳例）彼は明瞭に描かれたある画面に眼をとめた。

→ （是）一幅畫（面），他看得清清楚楚。

（訳例）ある画面が彼にははっきりと眼にとまった。

（訳例）についてはこれ以上日本語に引き写す方法を本稿では考えつけないが、A地V（O）型の統合意義特徴については、相プロセス（流相・異相）とのみ結びつけた統合意義特徴の規定は訂正すべきであると考えているにいたった。その理由は3点ある。

(1) 規定のなかの「意思(＝もくろみ)」の主体すなわち所有者について十分な定義づけがなしえない。(2) 相プロセスすなわち動詞意義素を述語として分類した述語類型としての「状態・過程・行為」レベルと、S P型の2項関係レベルで設定した「判定・変化・出来事」という叙述の営みの区別のほかに、さらに文の背景である状況(一定の叙述時点と叙述地点が加わった情報の総体)について述べる文法的営み「詳述」を、独立して考察する必要がある。(3) 詳述の営みを担う文法的位置は原則として「主語と述語の間」すなわちA地V型の状語Aの位置である。

上記の問題点は次項で改めて論じる。

## 2. 4 ④ “看” “聽” と “清楚” “明確” “明白” “糊塗” “模糊” の組み合わせ

本項ではVA型やV得A型を考察対象からはずして、A地V型についてののみ考察する。そして、どの形容詞が状語「A地」になった場合に(1) “看”の3種類の語義「見る」「考える」「読む」の内、どの語義が表示されるか(2) そのとき、述語Vの後ろにどの補語が必要になるか、の2点について検討していく。また随時、聴覚動詞“聽”との比較をとりあげる。この3つの文法成分(状語・述語+補語・賓語)の呼応関係はきわめて整然とした体系をもっているようであり、A地V型の統合意義特徴の考察に関する有益な言語資料(【A地V型用例④】Ex.の順序を、aからはじめる。)になるものと予測される。

§ 1: “清楚” → 「見えた」「看到」(? “看見了”)

Ex.a 他清楚地／很清楚地／清清楚楚地看到了遠處的標語。

“清楚A”と述語との呼応によって決定される現象素(個々の文中で具体的に表わす状況)は「輪郭をくっきりと」である。“清楚地” “很清楚地” の評価

対象、及び“清清楚楚地”の描写対象を賓語の「遠處的標語」ではなく、述語の“看到了”（流相・異相）と解釈する理由として、以下の3点があげられる。なお、“清楚地”“很清楚地”“清清楚楚地”の詳述がどのように異なるかについては、拙稿1996a, 1999a, および原由紀子1986<sup>(15)</sup>における論考を継承しているものとして用例分析を行う。

（1）鄭貴友氏の論文について論じたように、「見る」という行為を始める事点（平相）からすでに存在する「定」のものが賓語として選ばれていること。その時には賓語の現象素に備わる客観的属性を表わすためには、連体修飾統合型が選ばれやすいこと。（2）（1）であるにもかかわらず、“遠處的”という連体修飾成分は原則的に“不清楚”“模糊”との語義呼応を優先すること。（3）さらに、“清清楚楚的標語”という統合が不自然であること。（あえて連体修飾語統合型を用いるならば、“寫得清清楚楚的標語”）

（訳例）彼は、遠方のスローガンがはっきり、見えた／見て取れた／見えてきた。

## § 2：“明白”→「考えた（見抜いた）」“看出”

Ex.b 他很明白地看出那是一個騙局。

＜“看”と“明白”はV A型・V得A型内では9種類すべての統合（4）が成立する。A地V型内では“把”字句の用例だけ見つからなかった。＞

この例文は多義文である。

（1）まず、述語“看出”はS P型で描かれた賓語を思考生産物格として要求する<sup>(16)</sup>。それは異相ではじめて判定できる対象であり、考え終えたあとで生み出された思考である。そして、「很A地」（“很明白地”）は【A地V型統合意義特徴Ⅰ】によれば異相に対するもくろみ（“完全にはっきりとした結果に到達すること”を意図する）を詳述していることになる。そこで、異相に出現した考え方（“那是一個騙局”S P型全体）に対し、疑いも無く明々白々のことであ

ると判定し得たことを詳述すると解釈できる。

(訳例) (1) 彼にははっきりそれがペテンであることがわかった。

(2) また、AN型では“明白的道理”なら成立するが“明白の騙局”は成立せず、SP型の“騙局很明白”も成立しないが、VO型として“明白騙局”が成立する。さらに賓語である“那是一個騙局”と状語“很明白地”の関係を考慮するならば、この賓語は“明白V”の賓語(思考生産物)になれることがわかる。このような文脈意義を鑑みるならば、例文中の“很明白地”は述語“看出”と同じく、主語によって経験者格を補填される思考動詞とみなせる裏づけが得られる。

(訳例) (2) 彼は賢いことに、それがペテンであると見破った。

この(2)の叙述内容については、経験者“他”と語義的に呼応しうる述語が2種類重なって述べられていることになる。語義的にも文法的にも2種類の述語を有する連続述語型(連動式)との差異は、思考V地V型では状語となる思考動詞(例文では“很明白”:ただし「やっとこう悟った」という状態を表すため、SP型“他很明白”は、“他”についての判定叙述となる)が「叙述時点での経験者Sの思考過程」が行為者S(経験者と同一)の行為と並存することを表わす点にある。

詳述の営みの定義「文の背景である状況(一定の叙述時点と叙述地点が加わった情報の総体)について述べる文法的営み」(既出)に拠るならば、状語“很明白”が述べようとする判定には、(1)(2)の2種類があることになる。(1)の意義では、判定対象になる情報が状況内において「“看出”の経験者が考えた結果生み出した思考生産物」すなわち「那是一個騙局。」である。状況全体のなかであって既成の思考となった「那是一個騙局。」がく経験者にとって“明白”であることを話し手の「状況全体を俯瞰する視点」にたって詳述していると解釈できる。(2)の意義では上記の如く、“他”が“看出”という思考行為を行うと同時に、“很明白”という精神状態を並存させている経験者でもあること



を表わしている。すなわち、この用例では経験者の行為から生じた出来事の叙述の他に、経験者の精神状態を詳述している。

この用例Ex.bが多義文であることを詳述の営みの視点から解釈することにより、相当な説明能力のあることは、次の用例が（1）の意義しか表わさないことを、合理的に解釈できることによっても裏付けられる。

他明明白白地看出了我話里的含意。

述語“看出”の賓語が名詞フレーズである場合、補填される格は「思考受け手」であり、「思考生産物」とは異なり、平相から存在する精神界の存在が思考を経てはじめて発見されて「存在がはっきりする」という変化を受ける。「AA地」（“明明白白地”）は【A地V型統合意義特徴Ⅰ】によれば流相に対するもくろみ（完全にはっきりした経過をたどることを意図する）を判定していることになる。詳述という観点から捉えなおすならば、“明明白白地”は状況全体のなかであって「他看出了我話里的含意」というすでに事実化した彼の行為のあり様を、話し手の状況全体を俯瞰する視点にたって描写していると解釈できる。

（訳例） 彼は一点の疑念もないほどに私の言葉のうらを見破っていた。

### § 3：“明確”→「考えた（みなした）」“看作”

Ex.c 他（很）明确地 把這種行為 看作惡意犯規。

<“看”と“明確”はVA型では統合しない。また、A地VO型内でも“把”字句を用いた二重賓語統合型でのみ、共起する。>

“把”字句は“看作”と呼応して処置性を詳述し、処置の結果は“這種行為（是）惡意犯規”という思考生産物（思考の結果）であると考えられる。この極めて珍しい共起制限は、文中の“明確”が実は“明確A”ではなく、“明確V”としての文法的意義特徴「（ある判断を）確定的なものとする」を表示していることによって生じていると解釈できる。

（訳例） 彼は断固として（反則であることを確定的にするべく）こういう

行動を悪意による反則だと見なした。

上記の分析が妥当であることは、あと唯一つ、“看”と“明確”が共起する例文としてあげられたSVOV得A型の解釈から裏付けられる。すなわち(1)

“看”の語義解釈が同じく「考える」であること。(2)語感の報告として、“明確”は“看得”を指しているとある。すなわち、“很明確”が評価しているのは、「彼がこの一件について考えている」時点での“看得”「考えるという事柄」に対する評価である。すなわち「考える方式」だけを“很明確”(確定的であり、正確である)と評価したことになる。この統合型内の“很明確”は、やはり思考のありかたをクローズアップして評価する点で、Ex.c内の“看”と“明確”の語義呼応と共通点があると考えられる。

他看這件事看得很明確。

(訳例) 彼はこの一件を考えてみた際に確固とした(妥当な)見方をした。

§4: “糊塗”→「読んだ」「見ている」「見なした」「看了」「看著」「看作」

A地V型内の“糊塗”との組み合わせでは、“看”はその後に付加する形式次第で3通りの語義を表わすようになる。それに対して、VA型内では“看”“糊塗”の語義的意義特徴の間に「相プロセスにおいて、相関関係にある一定方向の変化が認められない」ため、“看糊塗(了)”が成立するためには文脈意義の補充が必要になる。【文脈意義の補充方法】には2種類ある。

<“把”字句による出来事チェーン(事実因果関係の圧縮表現)>の補充<sup>(17)</sup>

- (1) “看”の動作主と、“糊塗”の経験者は別人である。
- (2) 後者は前者の相手である。すなわち「見られている」人間である。

大家都盯著我看,把我看糊塗了。

(訳例) みんなが私を睨み付けるように見ているので、私はあっけにとられた。

この“把”字句による出来事チェーンの形成は動詞が“聽”である場合

には成立しない。聞くという行為には他の人間に影響を及ぼすという状況が生じ得ないという「社会通念」が出来事チェーンを成立させないからであろう。

そのかわりに「聞こえてくる内容」が主題の位置を借りて状況の詳述（文の背景となる情報を提供する）をするならば，“聽糊塗了”は成立する。

這些話，我聽糊塗了。（O，SVA了型）

（訳例） こういう話は、私は聞いてもわけがわからない。

<SVOVA了型による無作為過程チェーン（因果推測関係）>の補充

- (1) VO形式は虚目的語であり習慣的行為、繰り返し行われる行為である。
- (2) VA型には1回限り「無作為のまま生じた相プロセス」という文脈意義が加わる。

你看書看糊塗了？這種事都不明白？

（訳例） あなたは本を読みすぎて呆けてしまったの？こんなこともわからないの？

また、V得A型でも、SVOV得A型という上位統合型を必要とし、行動パターンについての評価や描写という文脈補充が必要になる。（後述）

さて，“糊塗”は「人間（経験者）の精神状態」「行為を通して見た、その人間の能力や分別」の二つの判断対象を評価できるゆえに、「SA地V～O型」では述語Vの結果補語やアスペクト、さらにはO補填語の扱い方で、「単文の背景にある状況を詳述する角度」にバラエティがだしやすく，“看”の三種類の語義と呼応できる。

Ex. d 他糊里糊塗地看完了這本情節複雜的長篇小說。

“糊里糊塗”が描写しているのは、経験者自身が読書とともに経る精神遍歴のありかたである。“看完了”だけでは「どうしてわけがわからな

くなったか」について詳述が不足しているので言い切るには説明を加える必要がある（単文内補充）。この文では、“情節複雑的長篇小説”という読書対象の属性がそれにあたる。このように、単文内での文脈意義呼応を必要とすることは、A地“形式の詳述が「糊里糊塗」という）精神状態が（“看完了”という）行為と並存していること」を保証するための情報量の補充を必要とするためと考えられる。情報量の補充をどの程度必要とするかは、「A地V型統合意義特徴II」（3 § 2）の規定にある「社会通念」の強弱と並行しているとみなせよう。すなわち、「動作主が行う出来事が通常その感覚感情を生じやすい」とされるならば、情報量の補充は必要とされず、その社会通念からはずれるほど補充が必要になる。

（訳例） 彼はストーリーの複雑な長編小説をわけもわからぬままに読みおえた。

Ex. e 他糊里糊塗地看著孩子們佻情玩兒的樣子。

“糊里糊塗”が描写しているのは、経験者自身の「ぼんやりし続けている」精神状態である。単文の叙述時点つまり子供たちを眺めている時“看著”の精神状態を描写していて、原因の説明は必要ない。

（訳例） 彼はぼんやりと子供たちが思いっきり遊んでいるようすを見ていた。

Ex. f 他很糊塗地／糊里糊塗地 把這個建議 看作沒用的。

“很糊塗地”が評価するのは“把這個建議 看作沒用的”という思考を行った経験者の思考行為であり、「単文の状況全体での人のあり方」である。“糊里糊塗地”は「結論をだしていくにあたって、経験者が愚かであったこと」を詳述している。

（訳例） 彼は愚かなことに、この提案を役に立たないものと見なした。

（訳例） 彼はわけもわからないまま、この提案を役に立たないものと見なした。

以上、A地V型内での“糊里糊塗地”の用法を分析してくると次のことがいえよう。“糊塗”は経験者の心理知覚を表す人間を形容する形容詞である。これまでの統合意義特徴の分析【A地V型統合意義特徴II】では、上記3例でなぜAA形による描写が選ばれるのかが十分に説明できなかったが、本稿では「並存する精神状態」を一時的なものとして描写するための詳述成分として新たに定義づけることにする。（3. § 2）

§ 5：“模糊”→「見えた」「看見」「看到」<A地V型内でのみ共起する>  
Ex. 8 他模模糊糊地看見了一個人影。

（訳例） 彼にはある人影がぼんやりと見えた。

他模模糊糊地看到了房子裡的情形。

（訳例） 彼は家の中の様子をぼんやりと見てとった。

（1）“模模糊糊”が描写するのはともにO格補填語である。動作主とも行為そのものとも語義呼応をせず、それらを描写対象とすることがない。このことはV得A型内で使いにくくなる原因の一つと考えてよいであろう。また、“很模模糊糊地”は使えるが“模糊地”は使いにくい、つまり描写形容詞形のほかに評価形容詞形が使っても、通常の原形としての判断形容詞が使いにくいことは、VA型内で“看”と“模糊”が共起しないことと関連づけて考えてもよいであろう。

（2）賓語の連体修飾語の位置への移動については、“人影”の前へは“很模模糊糊的”“模模糊糊的”として移動できるが“情形”とは連体修飾統合型内で共起することはできない。すなわち、賓語が状語の詳述の対象であることと、賓語に当たる名詞と状語に位置する形容詞とが連体修飾統合型内、またはSP型内において共起することとは、つねに並行して現れるわけではない。この文法的事実は今後、「A地VO型におけるAとOの間に存在する語義呼応がA地V型によって統合促進されるか、統合を抑制されるか」などの観点から解明していく

必要があると考えられる。

## 2. 5 先行研究：「SVOVA了型」「SVOV得A型」の統合意義特徴

本項では先行研究として、(1)町田茂1991「『動詞—賓語—動詞—結果補語』式の文法的意味——処置の“把”と非処置のV」中国語学238号：(2)町田茂1992「『動詞—賓語—動詞+得—程度補語』式の文法的意味——処置の“把”と非処置のV」中国語学239号の2篇を取り上げる。町田1991は、「動詞反復式VOVR」は通常次の3条件を満たすとしている。

㊦Rは、Vの動作が成立したことによりはじめて存在し得る。

㊧Rはなりゆきとして発生した、いわば偶然の結果であり、動作主が意図をもって獲得した結果ではない。

㊨Rは動作主Sを叙述対象とする。(この条件がみたされない場合には何らかの制約が加わっている：例えば(53)你剪頭髮剪短了。＜君は髪を短く切りすぎたね＞予期不能のずれの一義となる。)

町田1991では、VRを4つの大きなグループA～Dに分けたうえで、4種類の文型(ア)VOVR(イ)VRO(ウ)OVR(エ)把OVRの中での使われ方を比較しつつ考察を進め、上記の結論を出している。本稿で重点的に取り上げている形容詞“清楚”をはじめとして、動詞は次のように分類されている。本稿でとりあげる補語Rはすべて形容詞なので、この分類ではすべてCグループに含まれる。(下線は本稿の加筆)したがって、Cグループの部分のみ引用する。

### 【C：成立した動作と動作に関する結果】

I 動作と動作自身における結果 (a)Rは動作の効果“說清楚了”“看透了”

(b)Rは動作が達した程度“喝多了”“看

慣了”

(c)Rは動作に対する評価 “訂晚了” “買錯了”

II動作と動作主に発生した結果 (a)Rが動作対象を持つ “學會了” “看懂了”

(b)Rが動作対象を持たない“喫飽了” “聽煩了”

(看書) “看哭了” (聽相聲) “聽笑了”

III動作と受動者に発生した結果 (a)Rは受動者がある基準を離れ、Rの方向へ傾斜したことを表す。

1 “寫大了” “買貴了”

2 “剪短了” “拉長了” (当然の結果)

(b)上記(a)以外 “洗幹淨了” “打死了”

IV動作とその影響を受ける事物に発生した結果 (喫樹葉) 喫腫了 (臉)

V動作とidiomaticな複合動詞 (念書) 念入了迷

【これらVRの〔(ア)式VOVR内での用法〕は、次のように記されている。】

C類I(a)：通常(ア)式を使わない。 ??他說話說清楚了。

他把話說清楚了。

(b) (c)：時に(ア)式が成立する。

Oに対比的色彩が加わる場合は(イ)式。

C類II(a)：一般に成立しない。 \*我學英語學會了。

\*我看書看懂了。

(b)：1グループは(ア)(イ)式が成立する。

2グループは(ア)式のみ成立する。 “他唱戲唱怕了。”

C類III(a)：1, 2グループとも(ア)式によって(受動者に発生した)予期不能のずれだけを表す。

C類Ⅳ：(ア)式VO1VRO2 が成立する。O2は動作の間接的影響を受ける事物であり、Rはその事物における(なりゆきとして生じた)結果である。

“我洗碗洗臟了袖子。”“他提肉提斷了兩根繩子。”

C類Ⅴ：(ア)式VO1VRO2 が成立する。

町田1991 で分析対象とした文型は、VOとVRの間にポーズも他の成分も存在しない動詞反復式VOVRに限定されている。その限りにおいて「(ア)式のみが成立する単文をVOとVRの組み合わせの典型とすること、かつ(ア)式が成立する場合に生じる特殊な意味に注目することによって3つの成立条件」を抽出することについては異論の余地がない。

しかしながら、「“VOVR”“VO, [他の成分] VR”の適用範囲は、VOVRとは異なっているのである。」という制限を加えて“把”字文と同一の文脈についてのみ考察し、VOVRの中国語の文型体系における位置付けとして「動詞反復文は“把”字文と対称的な文法的意味を有する」と結論をだすのは、些か早急にすぎるかと考える。つまり、VOVR型のトータルな用法を見通したうえでの結論をだすためには、少なくとも次の2つの視点を付け加えておく必要があろう。

- (1) 賓語Oの定不定および「はだかの名詞」を賓語とするVO形式の統合意義特徴が動詞反復文の用法体系の中で占める位置
- (2) 文末の「了」によって成立する事実叙述と、「了」のない論理叙述との相違が生じさせる、動詞反復文の成否への影響

以下、この2つの視点にたって、本稿でのインフォーマント調査の結果を検討していく。なお、\* (アスタリク) は、「その最大統合型だけでは文として言い切れない」ことを表わす。

【VOVA (了) 型用例①：町田1991でのCⅠ・CⅡ・CⅢ】

例文中の( ) 符号は、省略可能であることを示す。



例文中のアンダーラインは、省略不可能であることを示す。

Ex.a 他了解（這些）情況了解清楚了。 <事実叙述（已然）>

他認識（這樣的）形勢認識清楚了。 <事実叙述（已然）>

\*他了解（這些）情況了解清楚。

\*他認識（這樣的）形勢認識清楚。

你了解（這些）情況應該了解清楚。 <論理叙述（要求）>

你認識（這樣的）形勢應該認識清楚。 <論理叙述（要求）>

【VOVA（了）型用例⑥：町田1991でのC I・C II・C III】

Ex.a 他說這句話說清楚了。 <事実叙述（已然）>

他問這個問題問清楚了。 <事実叙述（已然）>

\*他說（這句）話說清楚。

\*他問（這個）問題問清楚。

你說（這句）話（應該）說清楚。 <論理叙述（要求）>

你問（這個）問題（應該）問清楚。 <論理叙述（要求）>

VOVA（了）型用例①Ex.aと、用例⑥Ex.aの<事実叙述>をまず比べてみる。単文を発句の文（文脈の支えがない文）を、事実を叙述する表現として聞いた場合、①VO部分の“了解情況”“認識情況”の賓語が形式上「不定」でもかまわず、場面からの「定」としての補充情報も受け入れられるのに対して、“説這句話”“問這個問題”という⑥VOでは賓語の形式を必ず「定」にしておかねば文を言い切りにくい。

しかし、反対に<論理叙述>を成立させるためには、用例①では“應該”をVOとVRの中間へ挿入する必要がある（VOの前でも通じるが、語感としては非典型的な表現となる）が、用例⑥の“說話”“問問題”の場合はVOの賓語形式を「不定」のままにしておいてもよく、さらに“應該”を省略してもよい。

こういう表現の違いが生じる原因は、“了解情況”“認識情況”の賓語では「不定」ではあるものの、「動詞の要求する格（思考対象）を補填する」という叙述

の営みが行われている、つまり動詞の側からいえば「O格補填語として選択する」という文法的呼応が営まれているのに対して、“説話”“問問題”の賓語はそのような文法的機能が（全くではないが）科せられていない「虚目的語」であるためと考えられる。虚目的語は意味的にはnon-reference（町田1991：参照点すなわち被指示物が存在しない）であり、本稿では虚目的語を賓語とするVOの統合意義を「その行為の典型パターン」を表示するものと考える。それは拙稿1995<sup>(18)</sup>で指摘したように、「V得」が「その動作の典型パターン」を事柄として表示するのと軌を一にしている、ともに（1）いかなる文脈におかれようとも、現象素のなかには弁別的意義特徴のみが含まれる。（2）動詞ではあるが、単文内の叙述時点・叙述地点を背景として受け入れず、「事柄としての動作または行為」を表示する。

本稿では「SVOVA型内のVO形式」について、大まかに3種類の統合意義のタイプが存在することと、それぞれのタイプがVA型によって決定される事実叙述と論理叙述の差異に呼応して叙述内容を形成し、単文が言い切れるかどうか（すなわち陳述をかぶせられるかどうか）を決定すること以上2点を次のように補足、指摘する。

#### 【SVOVA型内のVO形式の統合意義特徴】

賓語の種類によって、次の3種類に分けられる。

VO1：動詞がO格補填語として虚目的語をとり、事柄としての行為を表示する。

VO2：動詞がO格補填語として「不定」名詞句をとり、出来事としての行為を表示する。（ハダカの名詞または判断・描写修飾語と統合した名詞句）

VO3：動詞がO格補填語として「定」名詞句をとり事実としての行為を叙述する。

（固有名詞または指示詞と統合した名詞句など）

論理叙述（陳述としては「要求」）の場合、「VO1」は「VA型内の形容詞」の判断対象格評価対象格を補填できるが、「VO2」「VO3」は出来事・事実としての行為への判断叙述を営むマークとして“應該”／“要”などをVA型の前に補充する必要がある。

事実叙述の場合は、原則として「VO3」が<ノーマーク>で使用される。

## 2. 6 ⑥ “問” ⑦ “説” “表達” と “清楚” “明確” “明白” “糊塗” “模糊” の組み合わせ

町田1992 では、VOV得C型の分析文法的意味として、次のような見解が述べられている。『CがOを叙述対象としても、VOV得C全体がSの経常的性質を表す傾向を帯びることは、動詞反復式の重要な特徴である。（“老鼠挖洞挖得很深”）』『動詞反復式が「VによってOに何らかの変化を起こさせる」という「処置」を表す“把”字文とは異なり、「現実に実現した動作VOに付随した、Cという結果が動作主の意図を介さず自然発生的に出現した」という「非処置」の意味を有することを示している。』

本稿も、町田論文が限定した文型（VO形式の賓語は虚目的語または「不定」名詞句：VOとV得Cの間にポーズも他の成分も存在しない）の用例について提出されたこれらの見解に同意する。ただ、次の2点の理由で研究を深化させる余地が残ると考える。

（1）本稿の用例収集ではVO形式の賓語として「定」名詞句が置かれてはじめて成立するVOV得A型も含まれていること。VOV得A型の統合意義特徴を分析するためにはその成立要因の分析も必要と考えられること。（2）“把”字句と比較対照する以上は、“把”字句の賓語がノーマークでは「定」であることを見過ごせないと考えられること。

そこで、以下、SVOVA型とSVOV得A型内でVO形式が「定」の賓語

をとる場合の統合意義についてそれぞれ検討を加え、それぞれの統合意義特徴に新たな知見を加えられるかどうかを確認していく。

なお、これまでの考察に基づいて、SVOVA了型の述語を「VA了」と認め、述語類型としては行為・過程を表示するものとする。それに対し、SVOV得A型の述語を「A」と認め、述語類型としては状態・過程(AA形)を表示するものとする。また述語とその格補填語(第二次格の一部を含む)で形成する叙述内容の分類では、SVOVA了型は変化・出来事、SVOV得A型は判定を表すものと仮定して考察を進める。<sup>(19)</sup>また、本項ではこれまで何度か触れてきたように、叙述の営みとは別レベルの叙述内容の構成要素として、詳述の営みを定義づけようと試みる。

## §1 SVOVA了型(事実叙述)とSVOV得A型(論理叙述)の用法比較

本項では“清楚”類義語グループの用法が豊富にそう⑥⑦言語行為動詞ⅠⅡを扱うことにする。

### 【SVOVA了型の用例⑥】

Ex. a は3種類の解釈のできる多義文として報告された。

Ex. a 他問這件事問清楚了。

- (1) 彼自身が質問することによって、はっきりわかった。(“清楚V”)   
 「経験者“他”」へ移動した情報量と質が変化する。
- (2) この一件は彼が質問することによって、はっきりした。(“清楚A”)   
 現象素としては「賓語Oに関する回答」が、「変化する当体」になる。
- (3) 彼の質問の方法がはっきり(聞き手にとってわかりやすい)した。(“清楚A”)

想起される優先順位(1)~(3)は定まっているものの、該当文外から文脈意義の補充がなければ、その意味を決定できない。補充される文脈意義の例を挙げる。

(補充意義1) 以前他糊塗, 這次~~~~。

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）

（補充意義2）我讓他去問這件事，昨天～～。

（彼が関係者として積極的に尋ねに行っただのではない）

（補充意義3）他說話總是不清楚，沒有重點，這次～～倒～。（副詞はVOとVAの間）

（他の時やいつもの状態の話しぶりなど，具体的事例と比べてははっきりしている）

この優先順位のついた3種類の意味解釈のうち，（VAまたはVY）“問清楚”を含む上位統合型がどのタイプを表わしやすいかを調べてみる。

「OVA了」（2）O＝這件事

「S把OVA了」（2）（3）O＝這件事

「SVY了O」（1）以下の文脈意義を補充せねばならない。

「O＝這件事は，はっきり理解すべきことである。」

「動作者Sには理解する努力が求められていた（強制または義務として）」

「O，SVY了」（1）O＝這件事の文法的機能は提題されることによって叙述レベルでの格補填のほかに，「状況内の情報としての機能」（詳述の対象）が加わる。叙述内容の骨格としては経験者Sの思考状態の変化しかとりあげられない。

このように比較した場合，SVOVA了型が表す（1）（2）（3）のタイプには，他の統合型にはない次の共通した意義特徴が認められる。

その行為には積極性がなく，ある状態を獲得しようとする目的意識が含まれない。このことは町田論文の指摘する「非処置」の本質であろうが，SVOVA了型は（2）の意味も表し得るゆえに，本稿では「処置」という概念を避け，（1）（2）に共通する概念として「無作為」という意義特徴を採用することにする。

【SVOV得A型の用例⑥】

Ex.a 他問這個問題問得很清楚。

- (1) 彼はこの問題をはっきりとした表現で質問した。(“清楚A”)  
“問得”が擬似評価対象になる。
- (2) 彼が質問したのでこの問題をはっきりした回答が出た。(“清楚A”)  
“這個問題”が評価対象格を補填する。
- (3) 彼が質問しているとき、彼の頭脳はすっきりした状態だった。(“清楚V”)  
“他”が評価対象格を補填する。

Ex.a も3種類の解釈が成立する多義文である。この優先順位は先に検討した“了解得很清楚”(介詞“對”O型の賓語として“這件事”)の評価対象の優先順位とは異なっているが、述語動詞の類がいっぽうでは「調査する」という行為動詞、一方は「質問する」という言語行為動詞であって、O補填格にも「行為対象」と「思考受け手」という違いがあることを考慮するならば、それも当然のことといえる。ここで、比較対照すべきは同じ“問清楚”を含んだ「SVOVA了型」の示す優先順位であり、統合意義特徴の差異を表わすものとして、検討すべき言語事実は、それが「SVOV得A型」とちょうど正反対になっていることである。優先順位が高い解釈ほど、統合にあたって文脈意義からの補充を必要とせず、また文脈意義を生じて、後続の言語形成へ語義的呼応を要求することもなく、その統合型の文法的意義特徴を典型的に示していると考えられる。

まず、最優先の評価対象として“問得”が選ばれていることについては、これまでに規定した【V得形の統合意義特徴】に基づいて「“問得”は、“問”の弁別的特徴だけを表す形式であり、行為を事柄(名辞の一種:物体・人間と対比関係にある)として表す」する解釈に説明能力があるとみなせよう。「行為の行われる方式(ここでは質問の仕方)」を評価しているという語感、“問得”を名辞的概念をあらわすものと捉えていなければ生じ得ない。

次に、VO型の（定）Oが評価対象になっているが、文中に特定指示を表す形式が含まれることによって、この評価には叙述時点・地点が付加されていることがわかる。それでも“把”字句の加わった「S“把”OV得A型」と比べると「作為」特徴のないことがわかる。すなわち、「SVOV得A型」のなかでは、（不定）の賓語がとれること、また虚目的語がとれるという言語事実によって、統合意義特徴が「無作為」特徴を含むことが裏付けられる。

Ex.b （今天／昨天）他問問題問得很清楚。

- (1) 彼は質問の仕方がはっきりしている（上手だ）。

VO形式が虚目的語を含む場合、「動作主の通常の行動パターン」を表し、「習慣認定」とでも呼びうるような時空を越えた行為に対する判定叙述を導くことがある。

習慣的行動の行為の方式について評価するということは、動作主の一つの属性を表示するに等しい。

- (2) 今日／きのう、彼の（あの）質問のしかたは、はっきりしていた。

VO形式が虚目的語を含む場合、（不定）目的語と同じく、文脈から叙述時点や地点を補充されると、（定）目的語と同一の現象素を指示できる。

“問問題”は“説話”“喫飯”などと同じく、虚目的語を含むVO形式（VO1）である。VO1を用いた「Sの行為に関する属性表示」は、SVOV得A型だけが表すことができ、SVOVA型ではなしえない叙述の営みである。町田1992にも「VOV得C全体がSの経常的性質を帯びる」という指摘があるが、本稿ではさらにこの言語事実を、（1）VO形式の種類分け（2）「V得」形式の使用による判断対象・評価対象・描写対象の分化、という観点から説明できるか試みることにする。

## § 2 SVOVA型内で共起できず、SVOV得A型内では共起できる動詞と形容詞

⑥⑦の言語行為動詞ⅠⅡ内で、SVOVA型内で共起できず、SVOV得A型内では共起できる動詞と形容詞の組み合わせが見出せる。

“模糊”+ “問”・“説”・“表達”(M組と略称)

“糊塗”+ “問”・“説”・“表達”(H組と略称)

【M組用例】

他問這件事問得很模糊。

他說自己的想法／這件事說得很模糊。

他表達自己的想法表達得很模糊。

この例文の中で“很模糊”はすべて「V得」を評価している。すなわち、言語行為の方式が曖昧で聞き手に理解しにくいものであったと評価している。文中の現象素に共通している特徴は、使われた言葉遣いや話のポイントがばやけていたことである。3例とも「V得」以外の評価対象をもたない単義文である。

相プロセスを表すVA型の中で“模糊”が“問”“説”“表達”と共起しないのは、VA型が動作行為の方式を表示できるには条件があるためと考えられる。それは、これまで筆者が分析してきた統合意義特徴に基づけば、次の2点である。

(1) <評価形容詞>文脈意義の補充によって他の時点や地点で行われた動作行為との比較対照が行われる必要がある。比較には方向性が伴い、命令や要求に値する褒義の方式として比較される。(参照用例：“問清楚”(3)タイプ)

(2) <判断形容詞>相プロセスのなかで異相まで到達したあとを振り返ってフィードバックした判断は表示できない。判断対象は必ず過程や行為が変貌しつつある「流相での一定方向のベクトルをもった変化」でなければならない。



【H組】でV A型が成立しない条件を検討するには、“糊塗”が感覚感情形容詞としての用法を持つことを考慮せねばならない。そこでV A型が方式を表す条件というよりは、感情形容詞をV A型の補語に用いるための条件を、第（3）の条件としてあげねばならない。

(3) <感情形容詞>「社会通念」で当然と認められている、行為に必ず伴う感情変化であること。

【H組用例】

他問這個問題問得很糊塗。（他怎麼能問這樣的問題呢？）

他說這種話說得很糊塗。（他不應該這樣說！）

他表達他的意思表達得糊里糊塗的。

3例とも言語行為者の精神状態を評価または描写している。“問”“説”に関する用例には、（ ）内にしるしたような「行動への批判を加える」という文脈意義の補充または発生が見られる。それに対して、“表達”の用例は、「行動しているときの精神状態」が混乱していることを描写するだけで、特殊な文脈意義の発生はみられない。それは、“表達”のO補填語が“問”“説”のO補填語と異なり、行為とともに生み出される「思考生産物の内容が言語化された情報」としての思考受け手であり、行為の進展と精神状態との並存をV得A型でも表しうるため（状況内での感情と行為の並存は原則としてA地V型によって表現される）と考えられる。“表達得”の補語として“糊塗”の評価形“很糊塗”ではなく、描写形“糊里糊塗的”が用いられる理由もそこにあるといえる。

“問”“説”と“表達”の補填語の性質の違いは「“把”字句による出来事チェーンの叙述」と共起できるかできないかの違いにも影響を与えている。「S把OVA型」内で“表達”は“糊塗”と共起できない。

【H組用例（“把”字句）】行為（“問”“説”）の相手が“把”の賓語であり、行

為を受けることによって感情変化（“糊塗”）を起こす。

他把我問糊塗了。（“我”は“問”の相手格）

他把我說糊塗了。（“我”は“說”の相手格“説教する”）

\*他把我表達糊塗了。

以上の例としてあげてきたSVOVA型とSVOV得A型の用法の違いは、「行為の方式を判断（VA型）または評価描写（V得A型）する叙述の営み」がどう異なっているかという点から、両者の統合意義特徴の差異を示すものといえる。

### 3 本稿で新たに規定する統合意義特徴

前項まであげてきた用例とその分析に補足例を加えながら考察をすすめた結果、本項ではA地V型について、統合意義特徴IVを新たに規定することにする。

まず従来の統合意義特徴の規定をあげながら、それに本稿での見解または訂正を加えていき、新たな統合意義特徴を規定する。

#### § 1：A地V型が叙述する＜意思（もくろみ）＞について

【A地V型統合意義特徴Ⅰ】（大滝1996 a. p45）【形容詞が判断・評価（褒貶）形容詞であり、かつ主語が動作主格である場合】

動作主がある動作を行うにあたって、動作の異相・流相に対するプランのたてかた（もくろみ）を形容詞で詳述する。

“很”A形は異相（到達する様相）に対する意志（もくろみ）を判断・評価対象とし、AA形は流相（動作のやり方）に対する意志（もくろみ）を描写対象とする。

この規定の中の＜意思（もくろみ）＞については、＜実現へ向けての精神的積極性が存在する＞という限りにおいて、過った表現ではない。しかし、日常的表現で使う＜意思＞は、叙述の営みの種類から言えば出来事や変化を述べる事実叙述ではなく、能願動詞などを用いた論理叙述（判定）として表される。本稿の調査資料の中から該当する論理叙述として次の形式を指摘する。

＜VA型において統合できる動詞と形容詞の組み合わせの場合＞

VとAの間に、相プロセス内で一定方向のベクトル変化が同時に生じている場合であり、かつ＜形容詞は評価形容詞に限られる＞（計量形容詞“大”“長”などは除外）という条件のもとで、以下の形式が使われる。

- (1) 動作主の積極的希望として意思表示する場合：

動作開始以前の動作主の意思と動作行為がもたらす変化のありかたとの関係（文法的には主語と述語の間にさらに形容詞（ありかた）との統合関係）は、(S) A地V型を用いない。

【選択される統合型】

「S + “要” “想” + VA + O」型

- (2) 話し手からの要求が陳述として加わり、動作主ではなく話し手の意思（もくろみ）を表す場合：（1）のSを“你”とする以外の形式として

【選択される形式】

賓語の変化を要求する統合意義を表す形式

「S + VO + “應該”（：S = “你”ならば省略可能）+ VA」

「S（+ “應該”：省略可能）+ “把”字句 + V（得）A」

方式の変化を要求する統合意義を表す形式

「S + VO（虚目的語に限る）+ “應該”（：S = “你”ならば省略可能）+ VA」

「S + “應該”（：S = “你”ならば省略可能）+ A地 + V + “一下”  
あるいは“一V”」

なお、“問”と“明確”が構成するVA型は常に“問明確些”「V+ A+ “些／一點”」という比較形式によって行為の方式についての要求を表す。

＜VA型において統合できない動詞と形容詞の組み合わせの場合＞

本稿の調査資料の中からは次の2つの動詞に、A地V型でのみ組み合わさる形容詞が取り出せる。

“表明”+ “清楚”“明確”“明白”(= “清楚”)“糊塗”“模糊”

“知道”+ “糊塗” “模糊”

“表明”は「態度を明らかにする」という語構成からすでに結果まで含む動詞であるため、VA型が成立しないのは必然である。“知道”とA地V型でのみ組み合わさる“糊塗” “模糊”形はともに評価形容詞のうち貶義を表すゆえ、日常言語では意思や要求と関わりをもたない。そのうえ、“糊塗”は人間を形容する形容詞であり、動作の方式、賓語とは語義呼応をもたない。したがって＜意思＞の表現そのものが成立しない。§4の項でまとめて検討をくわえる。

§2：経験者の感情と出来事とが＜同じ状況内で並存する＞について

本稿の言語資料の考察に基づき変更した規定をアンダーラインで示す。

＜感覚感情形容詞が原形である場合＞の統合意義特徴は、他の＜評価形容詞の原形＞についても共通すると予想される。また＜“很”+判断形容詞(=評価形容詞形)＞は＜“很”A形である場合＞の原因格についての統合意義特徴を共有すると予想される。

＜AA形である場合＞については、感覚感情形容詞以外に並存を指摘できる形容詞グループが存在しない。新たに考察を加えなければならない。

【A地V型統合意義特徴II】(大滝1996 a. p55 →1999 b. P192)

【形容詞が感覚・感情形容詞であり、かつ主語が動詞の動作主格である場合】

＜感覚感情形容詞が原形である場合＞

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）

動詞の動作主格と形容詞の経験者格とが同一の人物を表示する名詞で担われることによって、形容詞意義素の指示する現象素枠と動詞意義素の指示する現象素枠とが連結されて、一つの状況をつくる。すなわち、形容詞の現象素枠から動詞の現象素枠へと状態と事柄が一貫してつなげられ、一連の出来事叙述が成立する。

＜感覚感情形容詞が“很”A形である場合＞、

経験者格・原因格がふさわしい名詞によって補充されたことを、第一人称者が肯定する。経験者格は動詞の動作主格と一致する。形容詞意義素が指示する現象素枠と、動詞意義素が指示する現象素枠とは同じ状況のなかで連結されて、感情状態と行為結果とが事実上因果関係にあると認める判定叙述・変化叙述が成立する。

原因格は、動詞が指示する現象素枠の事柄さらには状況の一部としての出来事すべてと一致する。すなわち、第一人称者（通常話し手と一致する）が、感覚感情を引き起こす原因として、出来事を認知し評価することにより判定叙述が成立する。

＜感覚感情形容詞が重畳形である場合＞

経験者の様子を描写することを主眼とする状態叙述が成立する。描写される対象（状態）は、動作主（経験者と一致する）を中心とする行為と同じ状況のなかで並存しうる一時的な感覚感情である。並存しているものとして描写できるかどうかは、「動作主が行う出来事が、通常その感覚感情を生じさせるという社会通念」が存在するかどうかを基準として決定される。

変更の根拠となった用例分析としては、“很糊涂地”“糊里糊涂地”に対する

考察その他がある。(2・4 § 4, 2・6 § 2)

§ 3 : <詳述の営みと叙述の営み>の語義的文法的呼応について

次の統合意義特徴は形容詞と動詞との語義呼応のありかた(詳述対象の設定の仕方)に注目して規定したものであるが、不十分な表現が多かった。

なお、この規定からは感覚感情形容詞が除外されている。

【A地V型統合意義特徴Ⅲ】(大滝1999a, p35) <現象素論>

状況全体の有り様について、その状況が成立する時点(過去、現在、未来)においてすでに存在した、存在している(事実叙述となる)、存在しうる(論理叙述となる)ものとされた出来事は、3種類の述語類型を含むことができる(①～③)。

- ① 動作行為 (ex. 実現への意志：能願動詞の付加)
- ② 過程 (ex. 相プロセスの変化事点：アスペクト助詞“了”  
方向補語)
- ③ 状態 (ex. 流相と異相の状態：アスペクト助詞“着”結果補語)

それぞれの状況内から、または述語類型が単文内で指示している現象素枠内から、「A地」は詳述できる対象「詳述対象」を見いだし、形容詞「A」が行う評価叙述と描写叙述の格補填関係に擬される「詳述」を行う。しかし、その詳述対象を現象素枠内から格としてとりだして、新たな言語形式を用いて表示することはない。

§ 4 : <動作行為が到達した異相で初めて出現するもの>についての詳述  
先に、本稿で新たに考察を加えるA地V型のタイプ2種類を挙げた。

- (1) A地V型でしか共起しないと述語Vと状語「A地」の組み合わせの存在；＜感覚感情形容詞＞を除外すると、「A地」は賓語を詳述している。
- (2) 補語によってO補填語に格変化がおこされなければ組み合わせることのない述語Vと状語「A地」の存在；「A地」は賓語を詳述している。

【A地V型でのみ組み合わせる動詞と形容詞の用法】（1）タイプ

Ex.a 〈模糊地 + 表明〉

通過這篇文章，他把自己的立場模糊地／很模糊地表明出來了。

他模糊地／很模糊地表明了自己的態度。

Ex.b 〈明確 + 表明〉

中國方面明確地／很明確地表明了他們的態度。

我們曾明確地／很明確地表明過我們的立場。

Ex.c 〈模糊 + 知道〉

他模模糊糊地知道一些秘密。

他模模糊糊地知道要發生一種大事了。

Ex.a～cの用例は統合意義としてそれぞれ特徴を有している。これらの特徴を総括的に整理することによって，【A地V型統合意義特徴IV】を見出せると予測できる。

Ex.a 2例ともすでに事実となった出来事の中で作り出された生産物について，「付加された属性が行為の正常な結果ではない」ことを事実として叙述している。意図的に付加したかどうかについては無規定と考えられる。

Ex.b 2例とも思考生産物に対して「付加された属性は行為の正常な結果である」ことを事実として述べている。この場合の“明確地”は“明確V”，“很明確地”は“明確A”と考えられる。両者の統合意義の差異は，【A地V型統合意義特徴II】における差異に共通するものとして解釈できる。

Ex.c 思考動詞“知道”は新しく生産物を生み出すことがなく，述語類型としては「状態」を表す。この“知道”ももっとも共起しやすい形容詞がA

A形“模模糊糊地”であることは、【A地V型統合意義特徴Ⅱ】では十分に説明できない。また、“模模糊糊的／(很)模糊的秘密”が非成立であることから、賓語を詳述しているという語感には生まれない。本稿のインフォーマントの語感および“模模糊糊地”のほかの用例についての解釈をあわせ鑑みると次のような考察が成立する。

「“模糊”は意義素内の弁別の特徴が<五感を通して得た知覚のありさまが曖昧である>ことにあり、S補填語はその<不定人称者の五感に刺激を与える原因格を担うメトニミー表現>と見なされる。」“模模糊糊地知道”は、知覚の状態をストレートに詳述する。なぜならば、「AA形は<臨時的な性質>を表すことができ（注11参照），“知道”が表示する<流相としての不安定であるが均一な状態><sup>(20)</sup>を形容するのに最も適した表現」だからである。

この解釈の裏づけとして“他知道得很模糊／模模糊糊的”が不成立であることが挙げられる。「V得」が表示するのは事柄（物体・人間と対比）としての名辞的概念<知ること>であり、述語類型としての状態<知っている>ではない。

### 【述語に補語が加わって初めて成立するA地V（V）型】（2）タイプ

アスペクト助詞が表示するのは、述語類型がそれぞれ相プロセスのどこに位置した状態・過程・行為であるか、である。しかし本稿の言語資料のなかでA地V型の成立要件として収集した補語はすべて方向補語であった。そこで、本項ではアスペクト助詞とも結果補語Aとも異なった方向補語Vの文法的意義特徴について考察することにする。使用頻度の高かった“出”の用法を例に挙げる。

Ex.a 他(很)模糊地洗出了這片照片。

S A地V出O型

他把這些照片(很)模糊地洗出來。

S把O A地V出来型

他(很)模糊地印出了這張畫。



他把這張畫(很)模糊地印出來。

- \*他：洗／印模糊了：這張照片／畫。 SVAO型
- 他：洗／印這張照片／畫：洗／印模糊了。 SVOVA型
- 他：洗／印這張照片／畫：洗得／印得很模糊。SVOV得A型
- 他：把這張照片／畫：洗／印模糊了。 S把OVA型
- 他：把這張照片／畫：洗得／印得很模糊。 S把OV得A型

この用例を検討していくと次のような考察が成立する。まず、各用例を相互に比較すると、状語「A地」を用いた場合に限り、「A」が異相で成立した状態（または異相まで到達してはじめて下せる判断）であることを言語形式として表現せねばならないことがわかる。しかし、O補填語が指示する事物が「定」として示されるのは、存現文のS補填語が「不定」であることを原則とする＜出現＞とはその＜成立＞という文法的意義特徴が異なっていることの現れといえる。すなわち、異相での成立という＜行為Vの相プロセスでのポジション＞よりも、格として「生産物格」であることを示す表現と考えられる。“寫”“畫”はもともと生産物格を要求する動詞であるが、A地V型自体でも＜どのように生産したか＞を統合意義特徴として有するために、述語類型として「過程」を選ぶ必要が生じたと考えられる。

ここで、おなじく生産に関わる統合型であるSVAO型だけが不成立（\*マーク）である理由を検討しておく。それは、賓語となる＜O補填語の現象素に存在する「適格基準」（形容詞のスケールを用いてはかり、褒義として捉えられる）＞に基づき＜実際に作り出された生産物が合致しない＞すなわち「失敗と判定する」SVAO型の統合意義特徴と、“洗／印模糊了”という明らかに“洗”“印”の動作の目的意識と逆行するVA、すなわち＜無作為によって生じた結果＞を含むVAの統合意義とが共起制限を引き起こしているからである。

次に、VA型内の結果補語として現れる形容詞は相プロセスの中で一定方向のベクトルを示すものでなくてはならないゆえに、判断形容詞・評価形容詞の

原形しか述語動詞と組み合わせることはできないのに対し、A地V型内ではベクトル性を捨象した“很”A形（評価形容詞形）やもともとベクトル性はず述語類型としては一時的状態をあらわす描写形容詞形が用いられることを比較対照して考慮せねばならない。A地V型内の「A地」は語義的には異相で成立した事物を評価し描写することがあっても、「V（V＝方向補語）」は相プロセスよりは一段上位の＜同一状況内での時間の経過＞を地点の移動という原義からの派生義を使って表現すると考えてよいであろう。もし、複数の状況を相前後するものとして叙述しようとするならば、接続副詞“就”などを用いたり、複句文を用いることができる。それに対し、方向補語派生義は、出来事に伴なう時間の経過を同一状況内に収める文法的特徴を有すると考える。

そこで、本稿では次のように【A地V（V）型統合意義特徴Ⅳ】を規定する。

「A地」（評価形容詞・判断形容詞の評価形・描写形容詞・判断形容詞の描写形）による詳述の営みは、方向補語によって表示される同一状況内の時間的経過を、外から状況を俯瞰する視点によって捉え、最終的にある状況が成立していく経過表現としての叙述内容類（出来事，変化，判定）に詳述を加える。

#### 4 おわりに

本稿では、新たな統合意義特徴として「SVOVA（了）型」「SVOV得A型」をも記述する予定で準備をすすめていたが、考察を進める過程で両者とも「事実叙述」「論理叙述」とを分けて分析せねばならないことがわかった。そのための言語資料の収集が不十分であったため、本稿では（1）＜VO形式＞に3種類を区別すべきこと、（2）動作の方式を判断する条件がVA型とV得A型と

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）

でことになっていること，を指摘するにとどまった。また，結果補語と方向補語の表現性の違いを（1）個々の文法的意義特徴（2）述語との統合意義特徴（3）文中での叙述内容との関係という3方面から総合的に考察する必要があると考える。さらに，総合的に統合意義特徴の体系を探究していきたい。

末尾ながら，本稿のような研究テーマとしては単独には存在できない分野の論考を，東洋文化研究所紀要という声望のある機関紙に掲載して下さった，関係諸氏に対し，深く感謝の意を表します。

- 1 大滝幸子1999 a「中国語動詞と形容詞“清楚”とが構成する統合型の文法的意義特徴（Ⅰ）」金沢大学中国語学中国文学研究室紀要第3輯pp1-48
- 2 大滝幸子1999 b「中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その一）」東洋文化研究所紀要第138冊pp131-194
- 3 大滝幸子2000「動詞と形容詞とが構成する文法構造—中国語3種類と日本語1種類の対照研究」金沢大学中国語学中国文学研究室紀要第4輯pp1-25
- 4 大滝幸子1999 b（注2）p168で挙げた【用例調査に用いた9種類の複合統合型】に更に3種類を加えた，以下の12種類の文型（★は本稿での追加文型）

【VA（述語結果補語）統合型】

【VA1】 O VA

【VA2】 S 把O VA

【VA3】 S VO VA

【VA4】 S VA O

★【VA5】(O) S VA

【V得A（述語様態補語）統合型】

【V：A1／A'1】O V得 A／（很）A・AA（＝重疊形）的

【V：A2／A'2】S 把O V得 A／（很）A・AA（＝重疊形）的

【V：A3／A'3】S VO V得A／（很）A・AA（＝重疊形）的

★【V：A4／A'4】(O) S V得A／（很）A・AA（＝重疊形）的

【A地V（状語中心語）統合型】

【A1V／A1'V】S 很A・AA地 V（～）O

【A2V／A2'V】S 把O 很A・AA地 V（～）

★【A 3 V / A 3 'V】S 很A・AA地 V (～)

- 5 拙稿2000 (注3参照) p25 で、取扱う中国語動詞の格 (正確には「格補填語」) の種類を17個列挙した。本稿では、その内の「精神対象」を主語の位置に置かれる格として扱い、従来精神対象と読んでいた格の種類を「思考対象」(拙稿1999 p164 「思考行為対象」に相当する) と呼びかえる。「精神対象」は「同定基準」格補填語を賓語として求める動詞 “是” “象” “叫” “表明” などの主語の位置におかれる格とする。すなわち、「精神対象」を主語とする単文の述部は、主部の内容をメタ言語によってさまざまに言い換えた (同定した) 叙述となる。
- 6 言語学の術語としての「示差的特徴」は、同一言語体系の中である言語形式と他の言語形式 (原則として類義語グループの成員) との差異を明示する語義的意義特徴または文法的意義特徴を意味する。それに対し「弁別的特徴」は、同一言語体系の中である言語形式または同一類義語グループの成員において、その形式を独自の言語形式として存在させるのに必要不可欠な語義的意義特徴または文法的意義特徴を意味する。

しかし、この本稿の【清楚1】での記述のように、外界の事物について用いる場合、

「他の事物と見分けるのに必要とされる特徴」という意味で用いることにする。

- 7 拙稿1999 (注1参照) p163 : 動詞の語義 (ここでは“清楚”“明確”“明白”) との共起制限ありかたを基準にして、意味分野のひとつとしての「事柄」(「物体」に対立する概念) を3種類に分けた分け方の一つ。

「行為に関する事柄」を表わす名詞表現の例：“事情的經過”“問題”“目的”  
“原因”，

「精神活動に関する事柄」を表わす単語の例：“意思”“想法”“態度”，

「非人為的事柄」を表わす単語の例：“事情”“情況”“内容”

“清楚V”がO補填語として、行為に関する事柄のみをとるのに対して，“清楚A”のS補填語には3種類すべての事柄があてはめられる。

- 8 大滝幸子1996a：「状語中心語統合型の統合意義特徴—形容詞と動詞の組み合わせを対象として—」東洋文化研究所紀要第129冊pp12～22

第二次格について、『わざわざ付け加えるということで「情報の焦点とされる度合い」は、通常の格よりもむしろ高くなる』と、規定した。また、叙述の営みのありかたについて、『第一人称者によって「何かを詳述するため」に述べられるもの』であり、介詞構造と状語中心語統合型が詳述意義 (統合意義とは別項のもの) を表示し、その修飾している統合意義が表示する現象素枠を、文の意義領域 (そ

中国語動詞と形容詞とが構成する統合型の文法的意義特徴（その2）

の文の叙述時点叙述地点（ともに同一性を保つ）での状況）に位置づける営みとした。本稿では、叙述と詳述を異なる視点による表現行為とする。

9 現象素論についての参考文献：

国広哲彌1994 「認知的多義論－現象素の提唱」

言語研究106号日本言語学会pp22-43

本稿における現象素の定義は、以下の拙稿1999 a. p6の定義を踏襲する。

「本稿では、国広1994で提唱された「現象素」の概念を、自然言語の個別性から本質的に解放された普遍的単位として次のよう扱うことにする。

- ① 外界および精神界の様相を、話し手が言語形式を使用する際に、意義素が指しうる範囲に枠づけて切りとることによって現象素が成立する。
- ② その現象素を言語使用時に伝達しようとする情報全体の一部分として位置づけることによって現象素枠が成立する。
- ③ 現象素枠を成立させる普遍的な言語的認知過程が、叙述の営みであり、また統合意義特徴として記述されるべき言語行為の特徴である。

このように、現象素を人間の普遍的認知過程を通して成立する「（発話時において、話し手の認知活動によって）枠づけて切りとられた様相」と捉えることによって、

「個々の認知活動のあり方を記述する」ことを、普遍性を保証された文法的意義特徴を記述すること（とみなせるようになる）と考える。」（ ）内は拙稿1999 bでの付記。

- 10 格補填語と格とを区別して考えること、すなわち前者と後者との関係を認知言語学でいうところの、メトニミー表現すなわち「事物の名称をもちいて事物の特色を表わす」（拙稿1999 a, p 25）やイメージスキーマの代表「容器によって内容を表わす」（拙稿1996 a）として解釈することを前提とした考え方である。

- 11 拙稿1996 a（注8参照）：p42-45, p 53-55

沈家宜1997, 形容詞句法功能的標記模式 <<中國語文1997年第4期>> pp242-250

- 12 “看見了”しか念頭になく、“看到了”の用法を検討しないまま立論した可能性がある。

- 13 大滝幸子1996 b「判断形容詞と動詞とが組み合わさった統合型の統合意義特徴の分析」東洋文化研究所紀要代131冊p148

【VA了N型の統合意義特徴Ⅲ】（アンダーラインは改変箇所）

【Nに対して指示詞による限定修飾が加えられて、統合が成立する場合】

動作行為の対象となった物体、または動作行為の結果生じた生産物にとって、

加えられる動作行為が目標とする適正基準が必ず存在していて、「動作行為が失敗して適正基準から逸脱した結果としての過分義」を判断形容詞で表す。

(付記：一般論の叙述ではなく、「個別の出来事叙述」(事実として実現済み)を表示する)

すなわち、この統合では「失敗した行為」を表現する。「通常の出来事叙述」としては、「把字句」(失敗義も表わせる)または「V了+A的N」(失敗義は表わさない)が用いられ、統合型の統合意義特徴に役割分担が見られる。

- 14 大滝幸子1995 「中国語に於ける連体修飾統合型と主述統合型の文法的意義特徴形容詞と名詞の組み合わせからの分析」金沢大学文学部論集文学科篇第15号

- 15 大滝幸子1996a：(注8)参照

大滝幸子1999a：(注1)参照

いろいろ補足再考すべき点があるが、ここでは特にこれまでの規定のなかの「意思(もくろみ)」について論理叙述(能願動詞“要”の付加など)と事実叙述とを分けて考察する必要を指摘しておく。

例えば(訳例)彼は遠くのスローガンをはっきり見ようとした。

他要看清楚遠處的標語。(??他要清楚地看(到)遠處的標語)

- 原由紀子1989「程度副詞“很”と状語の関係について」姫路独協大学外国語学部外国語学部紀要第2号pp173-190

「副詞“在”助詞“著”はAA地形とのみ共起する」という貴重な指摘がある。具体例には“寫字”と“清楚”，“擦桌子”と“幹淨”などの統合が挙げられている。

- 16 大滝幸子1999b(注1)参照：pp157-160

O格補填語となる統合型が名詞フレーズであるか、SP型であるかによって、述語が要求しているO格の異なる例を、思考動詞“明白”について記述してある。

- 17 大滝幸子1999.a(注2)参照。pp30-31

【(Ns)把Ns2VA】統合型の統合意義特徴【現】(賓語にAの経験者格を担はる)＜Vの動作主が(Ns)：Aの経験者(形容対象)が「把字句」の賓語Ns2＞

- (1) 同一状況で発現した出来事とおしを、相プロセス内には存在しない“他人の行為への常識的反応”や“事のなりゆきから生まれる生理現象”を判断根拠として、因果関係で結ばれた出来事として、言語化する叙述力を有する。
- (2) ＜動詞が行為動詞である場合＞

行為者の行為の相プロセス内に存在する格的要素をクローズアップして形容詞の形容対象とする他に、状況内に存在する「他の行為関連者」も形容対

象にクローズアップする現象枠連結機能を有する。

- 18 大滝幸子1995「述語補語統合型の統合意義特徴—動詞と形容詞との組み合わせを対象として—」東洋文化研究所紀要第128 冊pp1-62

＜注＞「事実」；事柄・出来事・事実・現実という4段階の概念体系内の一つ。

動作行為と経過について、事の流れと時の流れとの関係を4段階に区別する。

「現実」は、話し手が発話行為を行う発話時点での事の流れ。

「事実」は、第一人称者が叙述の営みで述べようとする状況（発話場面に對峙する叙述場面。叙述時点と叙述地点が特定されている）内の出来事。

「出来事」「事柄」とともに特定の状況からは切り離されてクローズアップされる事の流れ。ただし、出来事は、どの状況であるかを問わず、相プロセスや動作対象などに特定の特徴指定が加えられている事の流れ。

「事柄」は、動作行為または経過、状態を最も抽象的なパターンとして捉えた、“名辞的”概念。対立する概念は「物体」

これらの文意味論上の概念を現象素論に置き換えると、すべて前景（＝図）となる現象素（枠）と背景（＝地）となる状況との関係づけ、状況と発話場面との関係づけの区別として記述することができる。

【“V得”の文法的意義特徴】（大滝1995. p36→改変箇所あり）

「V得」は事柄を示すにとどまり、動詞の表す弁別の特徴以外には表示しない形式である。したがって、「弁別の特徴以外の特徴を特に必要とするような動作」の様相である現象素を指示することはできない。（付記：形容詞の格補填語として、“很A形”に対する評価対象格や“A A形”に対する描写対象格を表示できる）

- 19 大瀧1999b（注）p186

- 20 本稿では、「平相の状態へ復帰しうる状態」を「流相」として捉える。“知道”の状態は、また忘れること、知識のない状態へもどることが自然にありうるゆえに意義素としてはゴールが設定されていない＜無限動詞：状態＞と考える。これに対するのは、“死”が表す「平相から一挙に変化した次の安定した状態」であり、この逆戻りしない状態を無限動詞が表す「異相」と捉える。